

思いに寄り添い 心に触れる



愛知県立桃陵高等学校 衛生看護科3年 今村 紗也佳

「今までで一番楽しかった。ありがとう。」それは二週間前までは一切口を開くことなく暗い表情しか見せなかった患者様が、やさしい笑顔で、涙で頬を濡らしながら私にくださった言葉です。

私が臨地実習で受け持たせていただいた患者様は、自宅で転倒し、右大腿骨頸部骨折と診断され人工骨頭置換術を行った七十歳代の男性でした。初めて患者様とお会いした時は、手術後三日目で回復期にありながら創部の疼痛によりベッド上で過ごされていることがほとんどでした。私は、両耳が難聴である患者様に聞こえるように耳元に立ち、「はじめまして。看護学生の今村です。二週間よろしくをお願いします。」と笑顔で明るく振る舞いました。しかし、返ってきた反応は、^{うなず}くことなく、表情も変えることのない患者様の姿。そして、^{うつ}ろな目で疲れ切ったような暗い表情は回復過程にある患者様とは思えない印象でした。後に患者様が認知症とうつ病を^{わずら}っていると知った私は、『この二週間で、心を開いてくれるのだろうか。』と不安が募りました。次の日から、私は患者様と距離を縮めようと努力しましたが、患者様からは難聴のため「何を言っとるのかよう分からん。」と言われることが多くありました。そのため声の大きさやトーン、話す速度に気を付けながら、患者様が頑張られていると感じた瞬間は肩や背中に触れながら「できましたね。」「頑張られていますね！」と励ますようにしました。

患者様は、手術後、人工骨頭が入っている足が

脱臼しないように、日常生活動作に注意する必要がありました。しかし、説明をしても認知症によりすぐ忘れてしまうため、私は患者様の援助をする時は何度も見本を示し、患者様に真似てもらうように促しました。しかし、患者様は首を傾げたり^{かし}俯^{うつむ}いたり、あまり納得していない様子でした。その上、話をする時、何か言いたいことを我慢しているようにも見えました。そのことが引っ掛かり、実習日誌を書きながら、私は自分の患者様への接し方を振り返り、自分の心の中を正直に見つめてみました。『実習記録があるからこの情報は知りたいなあ。』『入院前の生活を知り回復期の援助をしなくては…。』等、学習のための自分本位の考え方が無意識にあり、患者様に伝わっていたかもしれないと考えました。『うつもあるからとはいえ、患者様が笑顔を見せないのは、私自身が患者様の思いに寄り添い心に触れる関わりができていないからか…。』そんな反省に至った私は、入院生活を少しでも快適に過ごしてもらえるように、しりとりや折り紙などのレクリエーションを行ったり、車椅子で病棟内を散歩したりして気分転換を図る計画をしていきました。すると、そんな些細な関わりでも、今まで表情を変えなかった患者様に変化が見えてきました。散歩中に、窓からの景色を眺めていると、「ここからはいい景色が見えるなあ…。」と柔らかい優しい^{まなざ}眼差しで、今まで見せたことのないとびっきりの笑顔を向けてくれました。患者様はこんな^{すがすが}清々しく豊かな表情

で、この時を楽しんでくださっているのだと実感でき、やりがいを感じました。窓の外から差し光で、患者様の笑顔は一層輝いて見えたため、こんな瞬間に看護を通して触れられることが嬉しかったです。そして、私は受け持ち当初^き訝えない表情の患者様に対して『うつだから仕方ないか…。』という決めつけと諦^{あきら}めのような思いがあったことを後悔しました。患者様の反応から、入院という生活の変化により一日中カーテンで仕切られた病室で過ごされている患者様の立場に立ち、思いに寄り添い心に触れるということは、理屈ではなく看護者としての自分自身の心の在り方にあるのだと気づきました。そして、闘病生活を送っている患者様の心が少しでも晴れ、患者様が安心して喜ぶ姿を見て嬉しいと感じられることが看護への原動力にも繋がるのだと確信しました。それからは、患者様の回復力を高める意味でも散歩を日課にし、患者様のペースに合わせたコミュニケーションを心掛けました。すると、最初は表情が乏しく受け身だった患者様が、私に欲求を示したり悩みを打ち明けてくれたりするようになっていきました。

「家に帰りたい。」そう何度も言う患者様を無理に励ますのではなく、リハビリテーションのもたらす効果を説明すると、「リハビリをやったら早く帰れるのか？」と、かつてない前向きな発言もみられるようになりました。その日のリハビリテーションでは驚くほど積極的に取り組んでいたのも、私の発した言葉が多少なりとも患者様の回復意欲を引き出すきっかけになれたのではないかと考えました。また、一人で動こうとしてしまった時や脱臼予防に向けた行動がとれなかった時は、否定するのではなく、患者様の思いを聴きストレスを軽減することに目を向けました。「そういうことか…。」私の説明に^{つぶや}呟きながら、自ら注意する行動をとり、会話や笑顔が増えていく中で、ようやく本当の意味で患者様と意思の疎通を図ることができるようになったと実感できました。一週間が過ぎ

た頃には、私が一日の終わりの挨拶をして病室を出ようとした瞬間、患者様が突然「さやか…。」と^{つぶや}呟き、私の手をぎゅっと握り、なかなか離してくれないことがありました。認知症で娘さんの名前すら忘れてしまったのに、自分の名前を覚えてくれていたことは、信じられないほどの驚きと喜びで胸が一杯になりました。翌日、指導者さんから、「今村さんが実習から帰った後にSさんが探していましたよ。」と聞いた時は、患者様が自分に関心を示し、看護者として必要としてくれたように思え、自信につながりました。

実習最終日、ずっと何も言わず、ただ私の手を握って見つめている患者様の様子がありました。普段と違う様子に少し戸惑っていると、患者様は^{あふ}溢れんばかりの涙を浮かべ、「今までで一番楽しかった。ありがとう。」と次々とこぼれる涙を拭くこともせず、握っていた手に力を込めながら、何度も何度も言うてくださいました。

私は今回の実習で人と人との関わりについて深く学ぶことができました。手術後からだんだんと回復していく患者様の経過を、実際にこの目で観ることができ貴重な経験をしましたが、それ以上に“患者様と信頼関係を築く”重要性について考えさせられました。受け持ち当初^き訝うつつがあるから…。』という言葉で片付け、患者様が抱えている思いに寄り添い心に触れる関わりができていなかったと思います。しかし患者様と関わっていくうちに、患者様の中には、本来の優しい温かい人柄が隠れていて、今までの人生で培った豊かな感情や、私の話を寛容に聴き、頑張ろうと努力している姿がひしひしと伝わってきました。そこに触れ合うことができた時、患者様との信頼関係が築けるのだと感じました。だからこそ私はこれからも自分自身に問い続けていきます。

『患者様の思いに寄り添い 心に触れる』『そんな看護ができていますか…。？』と。